様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：３２７２０
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０１６３３

研究課題名（和文）「教える」専門家の養成を学問として構築する「教育学」モデルの研究

研究課題名（英文）The Study on "Pedagogy" Related to Training Excellent Teaching Professionals Based on Comparing with Different Countries

研究代表者
生田　久美子（Ikuta, Kumiko）

田園調布学園大学・大学院人間学研究科・教授

研究者番号：８０２１２７４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　13,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、学問としての「教育学」の本質に“「教える」専門家の養成”を据え、「教える」専門家が持つべき「専門性」を、教育哲学・教育思想、教育史、教育制度・教育行政、教育実践の４つの専門領域から分析した。また、日本国内及びアメリカ、イタリア、台湾、香港等でのフィールドワークを行い、国際比較の視点から“「教える」専門家の養成”における実践的課題を検討した。これらの検討を通して、教師の「専門性」を概念的水準から再構築する新たな「知」の様式を明示し、当該の新たな「知」と教員養成課程の実際とを有機的に結び付けていくための、「教育学」に必要となる諸要素を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、現代の教員養成及び教師の成長・熟達に関して、「教える」専門家という視座から原理的・制度的・実践的探究を行うことを通して、より質の高い教育を提供しうる卓越した教師の在り方及びその養成、成長・熟達に必要となる諸要素を示した。これらの研究成果は、教員養成課程及び教育現場における制度設計、環境構築、個別サポート等を構築する際の基礎を提供しうる。また、本研究課題は国際比較に基づき、理論分析及びフィールド調査を実施した結果、当該の研究成果は国際的な卓越性を問ううえで共有可能な概念及び議論等を構築する土台を提供する可能性を有している。

研究成果の概要（英文）：This research focused on ‘ the development of teaching professionals ’ as the essence of pedagogy as an academic discipline, and analyzed the expertise that teaching professionals should possess from the four specialized areas of philosophy of education, educational thoughts, history of education, educational systems and administration, and educational practice. In addition, fieldwork was conducted in Japan, the USA, Italy, Taiwan, Hong Kong and other countries to examine practical issues in the training of ‘ teaching ’ professionals from an international comparative perspective. Through these studies, a new form of knowledge that reconstructs the ‘ expertise ’ of teachers from a conceptual level was clearly identified, and the elements necessary for ‘ pedagogy ’ to connect this new ‘ knowledge ’ with the practice of teacher development programs were presented.

研究分野：教育学、教育哲学

キーワード：教員養成　教育学　教師の専門性　国際比較　わざ　省察的実践家

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現在、教育学は極めて大きな問いに直面している。それは、「教える」専門家としての教員養成の根幹が問われる中で、学問としての「教育学」が果たすべき役割が不明瞭であるという点である。その大きな原因として、第一に、アクティブラーニングに代表される「ラーニング」「学び」重視の言説の流行、第二に、ラーニングの強調にともなう「ティーチング」「教える」の軽視あるいは退行という状況を挙げることができる。この二つは、本来的には「教える－学ぶ」営みとして不可分であるはずの「教える」及び「学ぶ」行為が、分断され対立的にとらえられる図式の存在を示唆している。その結果として現場の教師は二つの対立的にとらえられる営みを同時に成立させることを求められており、結果としてそのことが現場の混乱や教師の過重労働といった課題を生み出す一因になっている。ここには、多様な「教える－学ぶ」関係を基盤とし、「教える」とはいったいどのような営みであるかを探求する研究の必要性が示唆されている。

一方、平成 30 年度に実施された全国規模の教職再課程認定は、改めて「教職」とは何か、そこにおける「教育学」が果たすべき役割とは何かを社会にも学問にも突き付けているといえる。こうした状況下において、教職課程（教員養成）を「教育学」にとって不可欠な要素として位置づける（学術的に充分な知見に基づく）ことは、教育学領域が本来的に担う役割として想定すべきである。「教員養成」に、理論と実践とを包括する最先端の「教育学」が適切に活用されていくことが、また「教育学」が「教員養成」という要素を付加的にではなく、本来的な要素として位置づけることが、より望ましい「教育学」及び「教職課程（教員養成）」の構築において求められている。

以上を踏まえると、現代社会にける教育学に求められる役割として、“「教える」専門家の養成”という概念・実践・制度を明らかにすること、及び当該の理論的探究を、現実的かつ実現可能な形へと結びつける議論の土台を提示することがあげられよう。これらは、「教育学」という学問領域そのものが、現代社会にとって持つべき意義及び社会的使命を再提示することの必要性である。

２．研究の目的

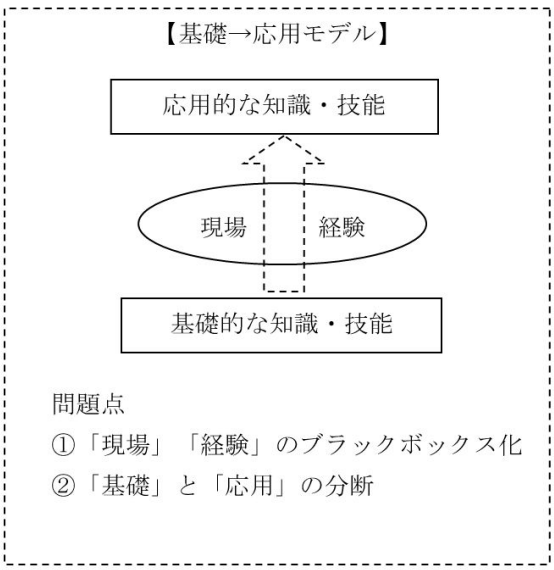
本研究の目的は、以下の２点に集約される。

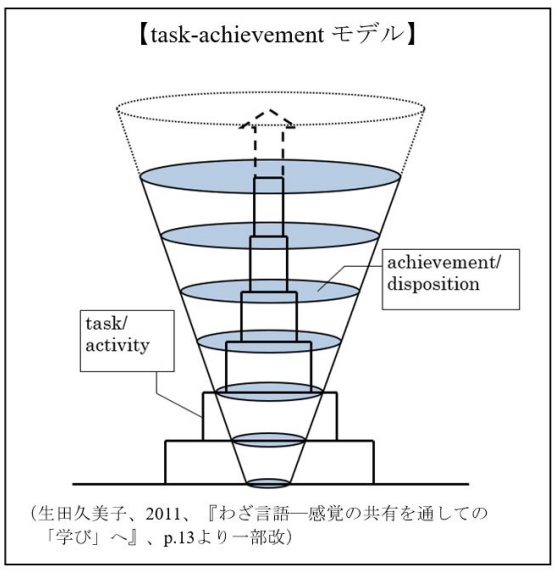
（１）「教える」専門家がもつ「高度な専門性」の特徴を明らかにする。

：「基礎→応用モデル」から「task-achievement モデル」への転換

従来、「熟達した専門家（ベテラン教師）」と「初学者（新任教師）」との違いは、単なる知識や表面的なテクニックの違いでは説明できないことが指摘されてきた。「熟達した専門家」の特徴は、①学習者に対する相互応答性、②その場や状況に応じた即興性、③自らの知見に基づく創造性にある。

しかしながら、これらの「高度な専門性」がどのように育成されるのか、という点については、「基礎を身につけたうえで経験を積む」「現場に飛び込むことが重要」といった、極めて曖昧な説明にとどまっている。「実践知」「現場の知」といった新たな「知」の様式と、日々実際に遂行されている教員養成課程の現実の授業・資格とをいかに有機的に結び付けていくか、という問いへ実践的かつ学問的な応答をなし得る「教育学」のあり方（モデル）を提示することが本研究の目的である。そこで、本科研では「高度な専門性」の育成・熟達に対して、概念部分からの検討を試みた。（下図参照）





（生田久美子、2011、『わざ言語―感覚の共有を通しての「学び」へ』、p.13より一部改）

（２）「教育学」と「教える」専門家の養成との間の歴史的・制度的な関係性を明らかにし、「教育学」に基づく「教える」専門家養成システムの在り方を提示する。
：「教育学なき教員養成学部」から「教育学に基づく専門的実践共同体」への転換

戦後改革期以降、教員養成課程の「開放制」に基づき、「教育学」と「教員養成」の間の関係性はどのように変化してきたのだろうか。特に、2005 年の「規制緩和」により、公私立の一般大学で小学校教員養成プログラムの新設が急増したことは、「教育学」のディシプリン不在の教員養成が現在の日本で進行中であることを意味している。

ここで本研究は、日本の教員養成制度が真に質の高い教員に資格とキャリアを提供するシステムとなりえているかを実証的に検証し、より高度な「教える」専門家養成システム構築のための改善策を講じることを目的とした。この検証を通して、日本の現時点での教員養成がもつ「教員免許状授与に際して国家試験等を課して全国一律に教職入職者の知識・技能を検定するシステムを持たない」「課程認定の運営強化以外に、中央教育行政が教員の質を管理する有効な手立てを持たない」（岩田、2018、「「開放制」原則下の規制緩和と教員養成の構造変容（1）」p.52）という問題点に対する有効かつ実現可能な打開策を提示することを目指した。

以上、本科研では、２つの目的の達成を通して、「教える」専門家の養成を学問として構築する「教育学」のあり方の提示を試みた。

３．研究の方法

上記２.で示した研究目的を達するため、本科研では下記の研究方法及び研究計画を実施した。

（１）文献調査・概念分析の集積と、理論的土台の構築に基づくフィールド調査の準備

研究初年度である 2019 年度を中心に、「教える」専門家養成に関する学びが実践されている場面に関する国内外の文献調査を行い，これまでに明らかにされてきた知見を整理すると共に，「教える」専門家が有する「実践知」の育成・習得の構造化に向けた理論的枠組み及び方法論の構築を検証した。

①「教える－学ぶ」に関連する高度な専門性の育成を実践すると考えられるフィールド（学校教育・伝統芸能・芸術・スポーツなど）に関連する先行研究の分析を行い、分析の基本となる概念の整備を実施。
②教員養成の歴史的・制度的変遷に関する基本調査の実施。
③文献調査と並行した、フィールド調査の準備体制の整備。具体的には、対象者の選定，インタビュー内容の確定, インタビュー方法の検討, 特定の対象者に対する予備調査などの実施。

（２）国内外におけるフィールドワーク及び研究会等の実施、

文献調査及び先行研究分析で明らかになった知見や理論的背景を踏まえ、「教える」専門家の育成に関する実践の調査及び分析に関する横断的研究（異文化間比較研究・国際比較研究）を実施した。

（３）「教える」専門家の養成を学問として構築する「教育学」のあり方（モデル）の提示

研究期間全体の研究成果をふまえて,「教える」専門家の養成に必要となる基本的概念、制度、及び実践について検討し，下記の通り研究の総括を行った。具体的には以下の 2 点である。

① 【task-achievement モデル】に基づく「教える」専門家として獲得する必要がある知識・スキル・資質等を具体的に提示した。
② 国際調査及び、国際合同セミナー等を通して、「教える」専門家の養成システム・プロセスとしての制度構築に関する課題検証を行い、共有可能な提言として示した。

本科研では、上記の研究方法・研究計画を実施するうえで、研究組織として下記の役割分担を行った。

◎研究代表者：生田久美子（教育学・教育哲学）
：【task-achievement モデル】の分析に基づく「教える」専門家モデルの構築
（研究全体の統括，理論的枠組みの構築，報告書作成のコーディネート）

〇研究分担者・研究協力者
①「教える」専門性についての概念分析：教育哲学・心理学領域
・尾崎博美（東洋英和女学院大学准教授／教育哲学・思想）
：教育目的論からの「教える－学ぶ」関係の分析
・吉國 陽一（田園調布学園大学准教授／教育学・発達心理学）
：「教える」ことと「学ぶ」ことに関する哲学的、心理学的考察
②「教える」専門家の養成に関する歴史・制度的分析
・岩田康之（東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター教授／教師教育・教員養成史）
：日本における教員養成課程の歴史的変遷と制度に関する分析・検証
・八木美保子（東邦大学理学部教員養成課程講師／教育史・カリキュラム論）

：日本における学校から職業への移行に関する歴史的変遷と制度分析
・犬塚典子（田園調布学園大学教授／教育社会学・教育行政学・ジェンダー論）
：保育・幼児教育における教員養成過程の分析（研究協力者）
③「教える」専門家の養成に関する教育実践分析・検証
・畠山大（東京海洋大学准教授／教育哲学・思想）
：大村はまの国語教育実践の分析、teaching の概念分析
・岸田蘭子（京都市立高倉小学校・学校長）（研究協力者）
：小学校における「子どもと地域をつなぐ地域に根付いた教育課程」の実践分析
・高橋春菜（盛岡大学准教授／比較教育学）（研究協力者）
:イタリアにおけるインターカルチュラル教育課程及び実践の分析

４．研究成果

本科研の研究成果は以下の通りである。

（１）科研研究会の実施

本科研では、研究会を定期的に実施し、研究組織における各研究分担部分の進捗状況の共有、フィールド調査の準備、理論的枠組みの検討及び共有を行った。2019 年度～2022 年度までは新型コロナウイルス感染症の影響を受け、研究会はオンライン及びハイブリッドで実施された。また、科研成果の主要部分の一つとして進められた *School Was Our Life* 翻訳のための研究会も実施され、著者のジェーン・ローランド・マーティン氏を交えた翻訳研究会も実施された。

主たる研究会の日程及び内容は以下の通り。

①2019 年 8 月 28 日 中国・台湾の教員養成カリキュラム、教育史、教師の教養のとらえ方についてメンバー内で共有し、9 月の台湾調査の準備を行った。
②2020 年 5 月 22 日　各研究の進捗状況の共有、感染症拡大に伴うフィールド調査計画の修正および新たな実施計画を協議。
③2020 年 11 月 10 日「教師教育と教育学研究をめぐって」をテーマに、教育学の「政策科学」性、教科教育や教科内容と教育学の関係、「教職課程コアカリキュラム」について検討・共有。
④2020 年 12 月 23 日 *School Was Our Life* の翻訳内容について、著者であるジェーン・ローランド・マーティン氏とともに協議を実施。また、イタリアとの合同セミナー計画を検討。
⑤2021 年 5 月 18 日　*School Was Our Life* の完成・出版作業を進めるとともに、成果の共有・発信計画について検討
⑥2022 年 2 月 4 日　ジェーン・ローランド・マーティン氏とともに、『私たちの学校は良い生活（グッドライフ）だった』出版の反応等を検討、また、イタリア、ボローニャ大学との合同出版計画について検討。
⑦2022 年 6 月 12 日 「大学における教員養成」の日本的構造、「教育学部」の布置関係の展開、ディシプリンとしての教育学の枠組みを再検討。
⑧2023 年 3 月 15 日　2022 年度までの研究成果総括及び研究期間延長に伴う計画内容、及び今後の研究課題の検討、イタリア、ボローニャ大学との合同出版内容の確認。

（２）国内・国外におけるフィールド調査

本科研では、国内・国外の教員養成大学、教員養成課程を有する大学、各種学校等において幅広くフィールド調査を実施するとともに、教員養成課程の研究者、教員、学生、卒業生、現役教員等へのインタビュー調査を実施した。新型コロナウイルス感染症の影響により一部は期間変更及びオンラインでの実施となった。主たるものは以下の通り。

国外：
〇2019 年 5 月　アメリカにおけるジェーン・ローランド・マーティン氏インタビュー調査及び進歩主義教育を標榜する学校でのフィールド調査
<訪問先>Fayerweather Street School（Cambridge, MA）
Cambridge Friends School（Cambridge, MA）
Little Red School House（New York, NY）
The Calhoun School (New York, NY)
〇2019 年 9 月　台湾における教員養成大学の訪問調査及び、黄嘉莉氏、李奉儒氏、楊深坑氏、黄柏叡氏、陳盛賢氏、陳延興氏、楊銀興氏、楊思偉氏へのインタビュー調査
<訪問先>国立台湾師範大学（台北市）
國立台中教育大學(台中市)

国内：
東京シューレ葛飾中学校、東京サドベリースクール、和歌山県のきのくに子どもの村学園、

東邦大学、田園調布学園大学、岩手県立大学等を対象としたフィールド調査を実施した。また東京都、千葉県、宮城県等において、開放制教員養成課程で免許取得をして教員となった者を対象とした授業観察及び授業づくりに関する聞き取り調査を実施した。

（3）国際セミナーの実施

タイトル：**What is the "professional knowledge" teacheres are supposed to acquire?／MATURITA' della PROFESSIONALITA' DOCENTE e quale FORMAZIONE necessaria a raggiungerla？**

日　　時：**2021 年 3 月 10 日**　イタリア、ボローニャ大学との合同国際セミナー

開催形態：対面＆オンライン（**Zoom**）

参 加 者：**(イタリア) Prof. Stefano Piastra, Prof.ssa Rita Casadei**（本シンポジウムコーディネーター）**, Prof.ssa Silvia Demozzi,Prof.ssa Elena Malaguti, Prof.ssa Elena Pacetti, Dott.ssa Stefania Rossi, Dott.ssa Loredana Lombardi Dott.ssa Mariangela Scarpini,Dott.ssa Nicoletta Chieregato**

(日本) 本科研メンバー、犬塚典子（田園調布学園大学教授）、室井麗子（岩手大学准教授）、高橋春菜（盛岡大学准教授・本シンポジウムコーディネーター）

内　　容：イタリアと日本の教員養成の在り方について、当該科研のテーマである「教える専門家」の視点からオンラインでの調査を実施した。

報告内容：

- **The Institutional Framework of the Studycourse in Primary Education at the University of Bologna.**
  / Stefano Piastra–Course Director
- **Recent Issues on Teacher Education Reform in Japan - focusing on power balances of policies, administration and universities**
  / Iwata Yasuyuki (Tokyo Gakugei U.)
- From “Professional” based on “Technical Rationality” to “Professional” as a **Reflective Practitioner**
  / Ikuta Kumiko (Den-en Chohu U.)
- **Internship: the link between University and school**
  / Loredana Lombard
- **What the experienced teacher and the novice teacher share: ethical approach,** thoughtful practice and “theory-practice dialogue” as fundamentals of **teaching expertise.**
  / Silvia Demozzi (speaking) – PhD attendant dr. Nicoletta Chieregato
- **The role of specialized teacher in inclusive education**
  / Elena Malaguti

（4）学会発表、出版

本科研における研究成果の学会発表、出版における総数は下記の通り。

2019 年度　雑誌論文 **(2 件) (**うち査読あり **1 件) 学会発表 (4 件) (**うち国際学会 **3 件) 図書(5 件)**

2020 年度　雑誌論文 **(2 件) 学会発表 (5 件) (**うち国際学会 **2 件) 図書 (1 件)**

2021 年度　雑誌論文 **(6 件) (**うち査読あり **4 件) 学会発表 (2 件) 図書 (1 件)**

2022 年度　雑誌論文 **(1 件)**学会発表 **(3 件)(**うち招待講演 **1 件) 図書 (1 件)**

学会発表では、日本教師教育学会、日本保育学会、教育思想史学会、国際 **L,S.** ヴ　ィゴツキー学会、**OMEP Asia Pacific Regional Conference**、**International Conference of Korean Society for Early Childhood Education** 等での発表がなされた。

雑誌論文では、『教育哲学研究』、『近代教育フォーラム』、『ヴィゴツキー学』、『創成ジャーナル』『日本教師教育学会年報』等への掲載がなされた。

著書では、特に科研全体の成果報告の一部として、日本とイタリアの合同出版書籍である ***EDUCATION: QUESTIONS AND DIALOGUES (AT) WORK***（**2023, Edizioni ETS**）が出版された。同書籍においては、**2021** 年に開催された合同シンポジウムでの議論を土台として、日本・イタリア・中国・イギリス等の教員養成課程を対象として、その特徴及び課題、また土台となる基礎理論についての分析結果が日本、イタリアの双方の研究者から寄稿された。教員養成における基礎的理論を提供する「教育学」に対するニーズは国際的にも高いことが共有され、今後の具体的な課題が明らかになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 生田久美子	４．巻 124
２．論文標題 「ふれる」から「知る」を問い直す ： Knowing by touchingからKnowing by sensingへ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 教育哲学研究	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 尾崎博美	４．巻 30
２．論文標題 「教育目的」を「関係性」から問うことの意義 ： 「ケアリング」論と進歩主義教育が示唆する2つの系譜の検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 近代教育フォーラム	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yoshikuni, Y.	４．巻 1
２．論文標題 Rethinking the Ends and Means Scheme of the Practice of Early Childhood Education: From the Standpoint of Seeing Children’s Development as States that are Essentially By-products.	５．発行年 2021年
３．雑誌名 In The 11th International Conference of Korean Society for Early Childhood Education Conference Booklet	６．最初と最後の頁 237-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉國陽一	４．巻 増刊第1号
２．論文標題 ヴィゴツキーの心身問題における社会的なものの位置付けと、その教育学的示唆 -イリエンコフの観念的なものの概念を補助線として-	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ヴィゴツキー学	６．最初と最後の頁 47-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 横尾暁子・吉國陽一	4．巻 16
2．論文標題 いじめを引き起こす心理-社会的プロセスの分析: アルバート・バンデューラのMoral Disengagement理論に基づく質問紙調査を用いて	5．発行年 2021年
3．雑誌名 田園調布学園大学紀要	6．最初と最後の頁 33-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉國陽一	4．巻 5
2．論文標題 アルバート・バンデューラのMoral Disengagement理論から道徳教育への実践的示唆	5．発行年 2021年
3．雑誌名 創成ジャーナル	6．最初と最後の頁 115-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 生田久美子	4．巻 1249
2．論文標題 学術から読み解く「建学の精神」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 三田評論	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 畠山大・和山博人	4．巻 臨時特別号
2．論文標題 岩手県立大学教職課程における実務経験を有する教員と研究者教員との協働の実際―教職課程履修学生のキャリア形成支援に焦点を当てて―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 全学教職教育研究	6．最初と最後の頁 27-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩田康之・米沢崇・大和真希子・早坂めぐみ・山口晶子	４．巻 28
２．論文標題 規制緩和と「開放制」の構造変容―小学校教員養成を軸に―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本教師教育学会年報	６．最初と最後の頁 pp.30-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 犬塚典子	４．巻 3
２．論文標題 高大接続をめぐる社会的課題―北海道島嶼地域の視点から―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 田園調布学園大学教職課程年報	６．最初と最後の頁 pp.29-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 岩田康之
２．発表標題 教員養成系単科大学における教員養成と教育学 ―東京学芸大学の組 織とカリキュラムから考える―
３．学会等名 日本教師教育学会第３１回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yoshikuni, Y.
２．発表標題 Rethinking the Ends and Means Scheme of the Practice of Early Childhood Education: From the Standpoint of Seeing Children’s Development as States that are Essentially By-products.
３．学会等名 The 11th International Conference of Korean Society for Early Childhood Education
４．発表年 2021年

１．発表者名 犬塚典子
２．発表標題 保育士の継続専門学習―カナダ・オンタリオ州保育士協会の活動
３．学会等名 第73回日本保育学会大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 尾崎博美
２．発表標題 「教育目的」を「関係性」から問うことの意義―「ケアリング」論と進歩主義教育が示唆する２つの系譜の検討（フォーラム１）
３．学会等名 教育思想史学会第30回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 岩田康之
２．発表標題 教師教育政策・実践と教育学研究―その日本的布置関係の成立と展開 ―
３．学会等名 日本教育学会第79回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 IKUTA Kumiko
２．発表標題 From “Professional” based on “Technical Rationality” to “Professional” as a Reflective Practitioner
３．学会等名 日本・イタリア合同シンポジウム What is the "professional knowledge" teachers are supposed to acquire?（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 IWATA Yasuyuki
２．発表標題 Recent Issues on Teacher Education Reform in Japan - focusing on power balances of policies, administration and universities
３．学会等名 日本・イタリア合同シンポジウム What is the "professional knowledge" teachers are supposed to acquire?（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岩田康之・大和真希子・早坂めぐみ
２．発表標題 規制緩和と「開放制」の構造変容―小学校教員養成を軸に―
３．学会等名 日本教師教育学会第29回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉國陽一
２．発表標題 Vygotsky’s view towards the psychophysical problem and its relation to the issue of freedom ; Based on the analysis of notes from his personal archive
３．学会等名 第20回国際L,S．ヴィゴツキー学会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉國陽一
２．発表標題 Understanding the role of play in children’s development: Development as states that are essentially by-products
３．学会等名 OMEP Asia Pacific Regional Conference 2019 in Kyoto, Japan（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 犬塚典子
２．発表標題 日本における教育政策と保育―過去と未来
３．学会等名 CRFPE国際学術シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計7件

１．著者名 ジェーン・R・マーティン、生田 久美子、田中 智志、尾崎 博美、犬塚 典子、畠山 大、八木 美保子、今井 卓実	４．発行年 2021年
２．出版社 慶應義塾大学出版会	５．総ページ数 356
３．書名 学校は私たちの「良い生活（グッドライフ）」だった―アメリカ教育史の忘れもの	

１．著者名 井上 孝之、山﨑 敦子、畠山大他	４．発行年 2020年
２．出版社 みらい	５．総ページ数 180
３．書名 子どもと共に育ちあう エピソード保育者論［第２版］	

１．著者名 生田久美子・安村清美編著、佐伯胖・石橋哲成・内藤知美・高嶋景子・太田由加里・犬塚典子	４．発行年 2020年
２．出版社 北樹出版	５．総ページ数 176
３．書名 「子ども人間学」という思想と実践	

1．著者名 井藤元編著、平石晃樹、渡邊福太郎、苫野一徳、山本一生、米川泉子、田中智輝、広瀬悠三、尾崎博美、帖佐尚人、河野桃子、浅井宗海、井谷信彦、米津美香、小室弘毅、池田華子、羽野ゆつ子、畠山大、髙宮正貴、杉田浩崇	4．発行年 2020年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 284
3．書名 ワークで学ぶ教育学〔増補改訂版〕	

1．著者名 竹尾和子・井藤元編著、畠山大・他（著）、羽野ゆつ子・井谷信彦・尾見康博・池田華子・井上嘉孝・坂井祐円・畠山大・大塚類・遠藤野ゆり・小栗貴弘・渡辺忠温・帖佐尚人・小室弘毅・堀尾直美・市川寛子・松浦真澄・田中究	4．発行年 2019年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 282
3．書名 ワークで学ぶ学校カウンセリング	

1．著者名 咲間まり子編著、浅川茂実・池田法子・伊藤陽一・倉林正・甲賀崇史・佐藤匡仁・園田巌・永田真吾・原子はるみ・本間貴子・室谷直子・吉國陽一・矢野善教著	4．発行年 2020年
2．出版社 建帛社	5．総ページ数 160
3．書名 特別支援教育・障害児保育入門	

1．著者名 秋田 喜代美、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター、吉國陽一他著、	4．発行年 2019年
2．出版社 中央法規出版	5．総ページ数 435
3．書名 保育学用語辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉國　陽一 (Yoshikuni Youichi) (00839219)	田園調布学園大学・子ども未来学部・准教授 (32720)	
研究分担者	尾崎　博美 (Ozaki Hiromi) (10528590)	東洋英和女学院大学・人間科学部・准教授 (32718)	
研究分担者	畠山　大 (Hatakeyama Dai) (10616303)	東京海洋大学・学術研究院・准教授 (12614)	
研究分担者	岩田　康之 (Iwata Yasuyuki) (40334461)	東京学芸大学・次世代教育研究センター・教授 (12604)	
研究分担者	八木　美保子 (Yagi Mihoko) (50460035)	東邦大学・理学部・講師 (32661)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	犬塚　典子 (Inuzuka Noriko)		
研究協力者	高橋　春菜 (Takahashi Haruna)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	岸田　蘭子 (Kishida Ranko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
日本・イタリア合同シンポジウム What is the "professional knowledge" teachers are supposed to acquire?	2021年～2021年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関